

# 古池に蛙が飛び込んだら俳句にならない

## 感覚情報を伝達するための技巧

Writers' techniques for conveying primordial emotions to readers' minds and hearts

岩垣 守彦  
Morihiro Iwagaki

なし  
Freelance

When spring comes, all living things start to regenerate. Frogs come out from the earth, and they start to compete against each other for the diving championship in a deserted pond. Basho told about this natural phenomenon in a haiku 'Furuike ya kawazu tobikomu mizu no oto' by using a visualizing technique, because he would like to make readers feel it as true not only in minds but also in hearts.

I am going to analyze the characteristics of haiku techniques for evoking primordial emotions in readers' hearts.

### 1. はじめに

私たちは「英語，どうだった？」のように，欧米の文法では「文」ではない「文」を使っている。日本語では，必要がなければ，主語を言わないし，「てにをは」も使わない。

一方，学校では「文には主語と述語がある」という文法を学ぶ。したがって「英語は国際語です。」という「主語と述語」の整っている文も使う。また「主語と述語」のように見える「英語はむずかしい」という使い方もする。

さらに，私たちは「菜の花や月は東に日は西に」（蕪村）というような「文」ではない俳句に心を引かれるし，名詞だけ並べて「白樺 青空 南風・・・」と歌われると懐かしく感じる。

日本語のこのような多様性を統括的に説明するには「言語情報」を「主部 + 述部」の関係で解するだけでなく「主題 (topic) + 事例 (example)」，さらには「主題 (topic) + イメージ喚起事例 (visualizing example)」とか，「主題 (topic) × イメージ喚起事例 (visualizing example)」という組み合わせで考える必要がある。そうすると「俳句の仕組み」が見えてきて，「古池や蛙飛び込む水のおと」と「古池に蛙飛び込む水のおと」の違いが明らかになってくる。

### 2. 日本語の情報伝達の仕組み

伝達の観点から，情報は「論理情報」と「感覚情報」の二つに大別することができる。

#### イ. 論理情報の伝達

「知識・知恵の伝達」には，昔から「問いと答え」（対話・問答）と「言い換え」が使われてきた。つまり，

「A（と）は何か？」 「A（と）はB（のこと）である」

（「Aは（Bがするように）Cする」）

である。論文やエッセーなどは，この「問い・答え・言い換え」を自問自答的に繰り返して使う。たとえば，

哲学者（と）は	考える人（のこと）である。
考える人とは	a thinking manではなく， a man thinking である。

のように，そこでは「名詞」と「動詞」が，文法的には

「名詞 + 動詞」 「主部 + 述部」

と使われるが、これは情報としては

(かわいい)

「(未知なる)主題(topic) = (既知の具体的)事例(example)」

の関係である。

#### ロ. 感覚情報の伝達

感覚情報の伝達でも、基本的には

主部 + 述部  
(未知なる主題) = (既知の具体的)事例

である。それは「名詞」には「感覚情報」が含まれているので、組み合わせ方によっては「名詞」あるいは「事象」(名詞+動詞)で読者の心を動かすことが可能だからである。

ところで、名詞に含まれている「感覚情報」が心で「イメージ融合(imaginative fusion)」を起こすような使い方をミカエル・リファテール(Michael Riffaterre)は「詩は間接的に事物を表現するということである。別な言い方をすれば、詩は何かを語ることによって別のことを意味している。」(p.3 斉藤兆史訳『詩の記号論』, 勁草書房, 2000)と述べている。これは

主部 + 述部  
(未知なる主題) = (既知の具体的)事例

「主題」=「イメージ喚起事例」

と変えたもので、詩・歌がこの表現様態をとる、たとえば、

My heart is like a singing bird.  
私の心は 囀る小鳥のように(軽やかに弾んでいる)  
My love is like a red, red rose  
僕の恋人は 赤い赤いバラのように (激しくて美しい)  
You are a tulip seen today.  
君は 今日一緒に見たチューリップのように

など。どれも詩の中の一行で、最初と二番目は有名な「明喩(simile)であり、三番目も有名な「隠喩(metaphor)」で、いずれも「イメージ化(visualize)」の技巧を使って、受信者の心に「統合感情(intagreted emotions)」を生み出させているものである。

英語では「主部+述部」の構造を崩すことが難しいので、文法的な「主部+述部」の関係をそのまま「主題(topic) = 事例(example)」の関係として使い、その際に「事例(example)」を「イメージ喚起事例(visualizing example)」に変えることによって「感情喚起表現」とする。

日本語は「主部+述部」の構造を明示する必要がないし、「主部+述部」の関係では説明できない表現も可能であって特殊である。

したがって、欧米の言語と同じように、この形で感情を喚起することもできるが、「主題」と「イメージ喚起事例」を積算的に直接つないで

「主題」×「イメージ喚起事例」

という、欧米の言語にはない形で、発信者は受信者の感覚情報を刺激して「感情・感動」を喚起することができる。それは西欧の詩の影響を普通の日本人より多く受けた西脇順三郎の詩にも見られる「技巧」である。たとえば、

あかまんまの咲いてゐる  
どろ道にふみ迷ふ  
新しい神曲の初め  
(西脇順三郎: 旅人かへらず 113)

は、「主部+述部」(あかまんまの咲いている)が一部含まれてはいるが、「迷う」という動詞の「主語」は明示されていないし、また「あかまんまの咲いているどろ道に迷う」と「新しい神曲の初め」との間に文法的な関係はない。しかし、

イメージ喚起事例(あかまんまの咲いているどろ道に迷う)×主題(新しい神曲の初め)

という積算的な関係から、受信者は「心許なさ、不安、さらには、知的動物たる人間の宿命的な悲しさ」という「統合感情」を心に喚起する。

西脇順三郎の詩の「主題」×「イメージ喚起事例」という積算的な組み合わせは、彼独特の技巧ではなく、実は、日本独特の「俳句の仕組み」である。

### 3. 「俳句の仕組み」について

俳句と言われているものの中には、たとえば、

十六夜はわずかに闇の初哉（芭蕉）  
街燈は夜霧にぬれるためにある（白泉）  
タンポポのポポのあたりが火事ですよ（捻典）

のように の形をとるものがあるが、たとえば、「秋の夜や旅の男の針仕事」（一茶）という句は

「主題（秋の夜）」×「イメージ喚起事例（旅の男の針仕事）」

の形である。この句は になるように書き換えることができる。

秋の夜に	旅の男が	針仕事
時の副詞句	+ 主部	+ 述部
	主題	= イメージ喚起事例

リズムは「575」であり、季語も含まれているのが、これは英語の詩と同じ構造になり、

秋の夜に	In an autumn evening
旅の男が	A traveling man
針仕事	is busy Patching .

のように、そのまま英語に変換することが可能になるが、俳句ではなくなってしまう。「主題」と「イメージ喚起事例」の積算的な関係が消えて「主部と述部」が現れ、比重が「主題」から「主部」に移って、「論理」が先行して「感情」が付随的になってしまう。言い換えると、異質のもの

をイメージ喚起的に論理を超えてぶっつけ合わせて、衝撃的に一つの感覚的世界を創るという俳句の特性が消えてしまうのである。

この「主題 (topic)」×「事例 (visualizing example)」という考え方を導入すると、「主部 + 述部」の関係では説明することのできない(したがって、英語に訳すことができない)俳句も

「主題（菜の花）」×「イメージ喚起事例（月は東に日は西に）」

ととらえることができる。「菜の花」（主題）がもっとも美しい情景というところ、月は東に日は西に（イメージ喚起事例）あって、光が真横からさす彼岸の頃のあの一瞬だ、というのである。

### 4. 「主題×イメージ喚起事例」の観点から「古池や・・・」を読むと

「古池や蛙飛び込む水のおと」は一般の日本人も、英語に翻訳している英米人も、目と口では「古池や・・・」と読みながら、頭の中では「古池に・・・」と呼んでいるように思われる。そして、飛び込んだ蛙は一匹として、「古池」「蛙一匹」「水の音」のイメージの組み合わせから「静寂・静かさ」ととらえている。サイデンステッカーも、「古池」を old pond と訳したのでは英米人はイメージがつかめないで quiet pond とすべきだと言っているし、ハリー=ベーンも「水の音」だけでは意味が伝わらないので「水の音、そして後は静寂」と訳しているとのことから、英米でも芭蕉の「古池や・・・」の句は「静寂」と解しているようである。

この芭蕉の「古池や・・・」の句は、確かに「静かなイメージと印象」を与えるが、ラフカディオ・ハーンは蛙 (Old pond--frogs jumping in--sound of water.) を複数にしているし、日本人の中にも蛙は何匹かいたほうがおもしろいという人（アメリカ文学者・詩人の金関寿夫）もいる。この句は「静寂」を詠んだものであろうか。

この句の構造は「秋の夜や旅の男の針仕事」（一茶）と同じで、

## 古池に蛙飛びこむ水のおと

と詠み換えると、「古池に蛙（が）飛びこむ水のおと（がした）」という文の一部になる。主題の「古池」は「場所を表す副詞」となり「蛙」が「主語」になって、伝達の比重が変わる。「感覚情報の伝達」から「論理情報の伝達」になって「イメージ喚起事例」が消えてしまう。「575」のリズムであり、季語（蛙・仲春）がありながら俳句ではなくなってしまうのである。

重要なのは「古池」を「主題」にするという点である。

主題「古池」に対して、どのような「イメージ喚起事例」を積算的に組み合わせると予期しない衝撃的な世界が展開できるか。芭蕉が選んだ「イメージ喚起事例 (visualizing example)」が「蛙飛び込む水のおと」であったのである。なぜか。

「池」が最初から「古池」であったはずはない。家が建てられて庭が造られ、池もできた。つまり、「池」には出来たての頃があり、投げられた餌にぱくつく鯉に子供たちの歓声があがる時があった。その子供たちも大きくなって家を離れ、しばらくは老夫婦だけが閑かに暮らしていた。時には孫たちの声で賑やかなこともあったが、やがて、家の持ち主は世を去り、家も朽ち、残るのは「古池」だけとなった。悠久の自然の時間の中で、人の一瞬の営みで残るのは「古池」だけ。その池を楽しんでいるのは、ただ「蛙」だけ。

「古池」には、時の経過、生命の誕生と終了、家の盛衰、など、物理的な宇宙の時間の中における「人の営みの時間」が凝縮されるのである。確かに池は昔より静かであるかもしれないが、この句のココロ（心）は「静寂・静かさ」ではなく、「自然の時間・営みと対比して人の時間・営みのはかなさ」つまり「もののあはれ」である。それを「古池」（主題）という空間を表す言葉に、時間の表象である「動き」と「音」（蛙飛び込む水のおと）（イメージ喚起事例）を組み合わせる一点に集中させているのである。その意味で「もののあはれ」を詠んでいる「秋風や藪も畑も不破の関」「夏草や兵どもの夢の跡」も「寂しく哀しい」が、「古池に蛙飛び込む水のおと」は「もっ

と深く哀しい」と、300年にわたって、たぶん、大多数の人が意識することなく心の底で感じてきたから、この句は忘れがたかったのである。

## 参考文献

- Riffaterre, Michael: *Semiotics of Poetry* (1978, Indiana University Press) (齊藤兆史訳(2000)『詩の記号論』東京, 勁草書房)
- 岩垣守彦「言葉とイメージと映像と想像力の問題」(日本認知科学会ワークショップ, 中京大(06/08/04))
- 岩垣守彦「発信される「表現」と受信について」(ことば工学, 東京外大(070316))
- 岩垣守彦「感覚刺激の観点から感情喚起の方法を探る」(2007, 第13回LCC 例会(近畿大))
- 岩垣守彦「深層に沈んでいる感情を表層で波立たせる intertextuality の原点的考察」(071214 ことば工学, 大阪大)
- 岩垣守彦「読む」とは「創る」こと 「表現技巧」について (ことば工学(神奈川大2008/3/28))
- 岩垣守彦「日本語における感情喚起の表現をデータ化する」(2008/06/14, 人工知能学会全国大会ワークショップ(ことば工学)(旭川))
- 岩垣守彦「「勝手読み」について」(2008/09/05, 認知科学会ワークショップ, 同志社田辺キャンパス)
- 岩垣守彦「受け手の心に感情を喚起させる「言葉のデザイン」 俳句の場合」(2008/10/31, ことば工学, 武蔵野美大新宿キャンパス)
- 尾形侑『新編俳句の解釈と鑑賞事典』(2000, 東京, 笠間書院)
- 小海永二『現代詩の解釈と鑑賞』(1979, 東京, 旺文社)
- 佐藤和夫『海を越えた俳句』(1991, 丸善ライブラリー, 東京, 丸善株式会社)